

おくの細道 冒頭

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上
に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をおかふる物は、日々旅
にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひ
やまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢
をはらひて、やや年も暮、春立てる霞の空に、白川の関こえ
んと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねき
にあひて取もの手につかず、もも引の破をつづり、笠の緒つ
けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、
住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

表八句を庵の柱にかけおく。